

# „Helmbrecht“ の作者の身分について

(その二)

寺 田 龍 男

## 本 稿 目 次

- 2. Herbert Kolb の法律関係者説
- 2. 1. 序
- 2. 2. 作品内の法律関係記述

## 2. Herbert Kolb の法律関係者説

### 2. 1. 序

既に前稿で指摘したように Kolb はその演習で, „Helmbrecht“ の作者 — 彼も Wernher der Gartenaere がそれであるという前提に立っている — は法律関係者だったとする仮説を展開した。<sup>1)</sup> Kolb によれば, この作品の作者は (その名前が現存する一切の古文書に記されていないことなどから, 彼が高い名声を得るほどに, ‚gelehrt‘ であったかどうかはわからないものの) 本文の内容からみて読書体験 (‚Leseerfahrungen‘) があったにちがいないという。<sup>2)</sup> 他

---

※ 本稿は前稿 (寺田, 1987) と同様, 昭和 60 年度文部省在外奨学金給費学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学に学んだ際, Herbert Kolb 教授のゼミナール „Die Erzählung von Helmbrecht“ (1985 / 86 年度冬学期) で同教授の指導を受けた研究の成果の一部をまとめたものである。本稿の成立にあたっては Kolb 教授をはじめ, 浜崎長寿教授, 中川勇治教授, 浜田敏道氏, Andrea-Maria Falge, そして Otto Putz にお世話いただいた。あつく御礼を申し上げたい。

- 1) 寺田 1987, S. 129. なお Kolb は以前にこの作品の作者は Fahrender だったとする見解に与していたが, 演習の際の筆者の問いに対し, 現在ではこの考えを保持していないと述べた。(Vgl. Kolb 1962, S. 17 f.)
- 2) Kolb のこの表現は作者の「識字力」を前提にしている。なお前稿で予告した識字力やラテン語の, いわゆる「教養」問題 (寺田 a. a. O., S. 146 および 150) は, 紙数

方当時の成文法に記載されたいくつかの法的事項に対応する——おそらくそれらの専門的知識に裏打ちされたとみるべき——点が „Helmbrecht“ のテキスト内に少なからずみられるということから、Kolb は作者が当時の法律、特に安全・平和に関する法の起草ないしは記述に関係があった人物ではないかと推測しているのである。そこでまず本稿では、この作品の中から何らかの形で当時の法体系にかかわる記述の主なものを以下に抜き出してまとめてみる。なお Kolb の説明は口頭による簡潔なものだったので、ここでは主としてこれまで何人かの研究者によって議論ないしは指摘されてきた箇所を中心に据え、これに批判・検討を加えながら紹介してゆくことにする。さらにそれらは当時の代表的成文法である „Sachsenspiegel“ (以下 Ssp. と略す) と可能な限り対照し、場合によっては „Deutschenspiegel“ (同 Dsp.) と „Schwabenspiegel“ (同 Swsp.) もとりあげる。

## 2. 2. 作品内の法律関係記述

### v. 147—150

dar nâch gap daz getriuwe wip/ ir lieben sune an sinen lip/ keten-  
wambis unde swert: <sup>3)</sup>

(さらにまた、その気だてのやさしい女は、愛する息子の身に鎖かたびらを着せ剣をはかせてやりました。)<sup>4)</sup>

中世当時の農民はこうした騎士階級に属する武具を携えてはならなかったから、これは違法行為である。<sup>5)</sup>

---

の都合により次稿以降で扱うことにする。

3) 以下引用例文はすべて Ruh の校訂版 (1974) による。

4) 以下訳文は浜崎長寿教授の翻訳 (1970) を引用させていただいた。前稿同様、前後のコンテキストを切り離した形の引用なので、部分的に字句を生硬に改めたところがある。

5) Brackert et al. 1972, S. 141. Vgl. ミッタイス et al. 1971, S. 317 および 423.

v. 169

si kouft im tuoeh, daz was blâ.

(彼女は息子に青い布を買ってやりました。)

青い布をまとうことは、当時のオーストリアの Kleiderordnung では農民には祝祭日と日曜日しか認められていなかったという。<sup>6)</sup>

v. 255f.

darzuo gibe ich alliu jâr/ ze rehte minen zehenden gar:

(それにわしは毎年きちんと十分の一税も納めている。)

当時の農民は領主に対して、たとえば収穫など諸々の収入の十分の一を納めることが義務づけられていた (十分の一税)。<sup>7)</sup> ちなみにここで主人公の父親が農夫としては裕福な方であったことがわかる。当時の農民は結局十分の一どころか平均的にみて収穫の半分を貢租などで失い、隷属農民などの「村人」はきわめて貧しい生活を送っていた。<sup>8)</sup> それにもかかわらずこの農夫は vriman/ vriwip をかかえているのである。<sup>9)</sup>

v. 290f. : ,orden', ,ordenunge'

両者とも、元来「(神の意志によって与えられた) 身分の定め」を表す。<sup>10)</sup>

v. 345–348

und næme ein rehter hoveman/ dem gebûren swaz er ie gewan,/ der gedinget doch ze jungest baz/ danne dû.

6) Ruh a. a. O., S. 82 および Brackert et al. a. a. O., S. 141.

7) Ssp. II 48.4 – 12, II 58. 2. (久保 et al. 1977, S. 199 – 202, 209 f.) および Brackert et al. a. a. O., S. 142. なお Ssp. からの引用はすべて Landrecht である。

8) A. ボルスト 1987, 下 S. 31 および O. ボルスト 1985, 2 S. 146.

9) 本稿 v. 711 の項を参照されたい。

10) Gough 1947, S. 12; Speckenbach 1974, S. 91 f.

(ほんもののさむらいが百姓の持物をめしあげるときには、結局は裁きの場に出てお前なんぞよりずっとうまくやりおおせるものだ。)

この文自体は、作者が法律関係者であろうとなかろうと誰でも口にしようる類のものだろうが、厳然たる身分秩序を受け入れる保守的な姿勢が背後に存在するのは明らかである。なおここに出る ‚gedingen‘ という動詞は、「ある事に法廷でうまく決着をつける」という原意を持つ語である。<sup>11)</sup>

#### v. 349–357

nimst dû im ein fuoter,/ lieber sun vil guoter,/ gewinnet er din oberhant,/ sô bist dû bürge unde phant/ für alle die im haben genomen./ er lât dich niht ze rede komen,/ die pfennige alle sint gezalt;/ ze gote hât er sich versalt,/ sleht er dich an dem roube.

(お前が百姓からほんのこれっぽっちの飼料でもとって、いいか、もしもその男にとり押えられでもしようものなら、そいつから物をとった奴等みんなの罪をお前ひとりで背負わされることになるんだぞ。一言もいいわけさせてもらえず、たちまちのうちに一卷のおわりだ。お前が物とりをしている時に、もしその男がお前を殺しても、彼はただ天罰を加えてやったと思うだけだぞ。)

Kolb は演習の際にここを当時の法に対応する記述であると述べたが、その根拠になりうるものに次の例がある：

「誰しも平和破壊者を殺しまたは傷つけた者は、彼（平和破壊者）の逃走中または彼が平和を破った行為の際に彼を傷つけた旨、自分とも七人で立証しうるならば、それについて償いなしで済む。」(Ssp. II 69)<sup>12)</sup>

窃盗は中世当時きわめて重い罪とみなされており、それだけで自身の平和を失う、つまり死刑に値する行為だったのである。<sup>13)</sup> しかも現行犯であればひと

11) Ruh a. a. O., S. 83 および Tschirch 1978, S. 181.

12) 久保 et al. a. a. O., S. 223.

13) 註 21) を参照されたい。

言の弁明も許されないという厳しい扱いを受けたことは、中世当時の刑罰思想によっても裏づけられる。<sup>14)</sup> 先の „Helmbrecht“ からの引用例は、特に後半部分で当時の法によく対応しているといえよう。

#### v. 419

lâ mich ûz dîner huote,

(おれのことならもう構わないでくれ、)

この ‚huote‘ は、ここでは「妻子に対する家長の保護とその規定(権利・義務)」を表す(今日法的には Munt という語が用いられる)。なおこれと同じ意味をもつ ‚zuht‘ (ここでは「親の子に対する養育権」が問題になっている)も v. 425, 427, 435 に出ている。<sup>15)</sup>

#### v. 426

nû zuo des der neve si!

(どうなっても、もうわしは知らないぞ。)

同様の表現が中世の文献にはかなり出るが、これは明らかに法的背景をもつものであるという。またその頻度の高さから、一種の Formel であったと解されている。<sup>16)</sup>

#### v. 480—482

man liset ze Rôme an der phaht,/ ein kint gevâhe in sîner jugent/ von  
sinem toten eine tugent.

(ローマの法律によると [それを読むとわかるが], 子供は小さいときにその名付

14) たとえばミッタイス et al. a. a. O., S. 56 ff.を参照されたい。

15) Gough 1947, S. 17; Brackert et al. a. a. O., S. 143; Speckenbach a. a. O., S. 102 f.; Ruh a. a. O., S. 84; Tschirch a. a. O., S. 182.

16) この点に関しては Gough (a. a. O., S. 18) および浜崎 (a. a. O., S. 161) の解説が詳しい。Vgl. Brackert et al. a. a. O., S. 143.

け親次第で資質がそなわるんだそうだ。)

ここに書かれたことが実際にローマの法にあるかどうかの真偽は別にしても、そのローマが教会に関するすべての法令の元締めである教皇庁の所在地であることは論をまたない。また, *phaht* — 「法」や「法律書」を意味し、ラテン語の *pactum* と同様 — という語を用いていることから、何らかの形で作者に法的知識があることを窮わせうる所ではある。<sup>17)</sup>

空想をたくましくすれば、識字力のある作者がこのような科白を与太者の主人公に吐かせて聞き手の笑いを誘ったかもしれない。もっとも識字力のない作者が、遂に背のびをした言い方で聴衆を楽しませたのかもしれないが。

#### v. 571

*ich wil dem phluoge widersagen.*

(すきの仕事などおことわりだな。)

これは農業と縁を切るという宣言であるから、先の 419 行目よりも一層強く「父親の保護とその生活圏を離れる」ことを表すが、それだけでなく同時に父親と対立する関係に入ることをも意味する。これはきわめて重大な問題である。なぜなら「或る人が、自分自身のために約定した平和、これを破るならば、それは彼の首に及ぶことになる」が、<sup>18)</sup> 生まれつきの身分に属する平和なら、「約定」以前の問題だからである。ここで用いられている *widersagen* という動詞は、封建法では「平和を破り対立関係を宣言する」というほどの意味をもつ術語であるから、主人公はこうした宣言によって法律上農民身分を離れ、これによって農民としての権利を失い、つまり転落し、やがて有害 (*land-schädlich*) 人物になって行くのである。<sup>19)</sup>

17) Brackert et al. a. a. O., S. 144; Ruh a. a. O., S. 84.

18) Ssp. III 9. 2. (久保 et al. a. a. O., S. 240)

19) Lange 1970, S. 232; Brackert et al. a. a. O., S. 144; Speckenbach a. a. O., S. 102; Ruh a. a. O., S. 85.

## v. 660—682

an roube wart er sô swinde,/ swaz ein ander ligen liez,/ in sinen sac erz  
 allez stiez./ er nam ez allez gemeine:/ dehein roup was im ze kleine,/ im  
 was ouch niht ze grôz./ ez wære rûch, ez wære blôz,/ ez wære krump, ez  
 wære sleht,/ daz nam allez Helmbrecht,/ des meier Helmbrehtes kint./ er  
 nam daz ros, er nam daz rint,/ er lie dem man niht leffels wert;/ er nam  
 wambis unde swert,/ er nam mandel unde roc,/ er nam die geiz, er nam  
 den boc,/ er nam die ou, er nam den wider:/ daz galt er mit der hiute  
 sider./ rœckel, pheit dem wibe/ zôch er ab dem libe,/ ir kürsen und ir  
 mandel./ des hêt er gerne wandel,/ dô in der scherge machet zam,/ daz  
 er wiben ie genam:

(ものとりにかけては、彼はいかなく手腕を発揮し、他の者が手もつけずにおいたものでも、ことごとく囊中にとりこみました。何でも手あたり次第ごっそりと奪いとり、くだらない物だからといって馬鹿にすることなく、また、どんなにすごい獲物にも満足はしませんでした。安ものであろうと、上ものであろうと、曲っていようと、まっすぐであらうと、農夫ヘルムブレヒトの子、ヘルムブレヒトは何もかも奪いさるのでした。馬をとり、牛をとり、小さじばかりの値打のものまでひとつ残さず、ジャケットや剣をとり、外套や上着をとり、雌山羊をとり、雄山羊をとり、雌羊をとり、雄羊をとりましたが、後に彼は、己が身をもってその償いをするようになったのであります。彼はまた、女の体から上着、下着をはぎとり、毛皮の衣や外套をとりました。後に役人の手でとりひしがれたとき、女からものを取るなどしなければよかったと思ったことでしょう。)

ここでは主人公が出奔したあとで盗賊騎士の一味に加わり、一年たって(Vgl. v. 810 f.) 最初の帰郷をするまでの間にどのような悪事を働いていたかがごく大雑把に記されている。しかしどこを読んでも窃盗・略奪を繰り返したことが語られるのみであり、この間に彼が *landschädlich* な男として司法機関から手配されていたこと、より正確には、そのような人物としての了解が現実の作品受容者に得られたことは間違いあるまい。この物語の最後近くで彼と仲

間らが「現行犯」として<sup>20)</sup>捕えられた後、裁きの場で審理なしに即刻処刑されたという描き方は、こうした前提に立って初めて理解されるのである。<sup>21)</sup> なお本文 676 行に出る ‚hiute‘ (<hūt: Haut) は文脈上皮膚の刑、つまり「答刑」——これは斬髪刑とともに「皮髪刑」(Strafen zu Haut und Haar) をなす——を意味しうるのだが、ただこれはふつう、死刑や手足の切断刑に値しない軽犯罪に適用される刑罰であるから、Tschirch のようにそのまま解釈しては前後の辻褄が合わなくなってしまう。そこでここでは浜崎、Brackert らの解釈に従った。<sup>22)23)</sup>

#### v. 693f.

ze hove er urloup dô nam/ und ze dem gesinde sam,

(そこで、あるじや朋輩にいとまごいをいたしました、)

‚urloup‘ という語は周知の通り「(主君の許を) 立ち去る許可」を表すが、法的にみても古来の習慣を受け継いだ Lehnrecht (封建法) 上ひとつの術語で

20) 本稿 v. 1652 – 1654 および 1667 f. の項を参照されたい。

21) さもなければ、つまり一般の裁判では弁護人を立てて審理を受ける権利があったのだが、有害人物にはこれが認められていなかったのである。Vgl. Ssp. III 35.1 および III 36. 2 (久保 et al. a. a. O., S. 267 ff.) および Lange a. a. O., S. 229. なお 13 世紀当時、死刑に値する犯罪には、殺人、強姦、誘拐、放火殺人、強盗、窃盗、背信行為、異端行為、不貞、押し入り、不当な復讐行為等多数があった。Vgl. Lange a. a. O., S. 231 および Ssp. I 68. 4, II 13. 1 および 4 – 7, 28. 3, 39. 1, III 1. 1 (項目は久保 et al. a. a. O. による)。

22) 久保 et al. a. a. O., S. 231; ミッタイス et al. a. a. O., S. 424; Tschirch a. a. O., S. 97; 浜崎 a. a. O., S. 57; Brackert et al. a. a. O., S. 41.

23) 本文に v. 681 を初めとして v. 1262, 1620, 1625, 1630, 1642, 1647, 1679, 1746 に出る ‚scherge‘ —— これらの個々の意味については多くの研究者が様々な議論を展開している。たとえば Scherge が死刑の執行まで行ったか、など —— は単に „Helmbrecht“ と当時の法との関わりだけでなく、この作品がどこで最初に作られたかという問題にも大きな意味をもつ。しかしここでは v. 1018 に ‚hâhære‘ 「死刑執行人」という語が出るということと、文脈によって ‚scherge‘ の機能も変わりうるという点を指摘するにとどめる。Vgl. Schiffmann 1917, S. 5 f.; Panzer 1925, S. 147 ff.; Lange a. a. O., S. 225; Brackert et al. a. a. O., S. 145 および 154; Speckenbach a. a. O., S. 95 f.; Ruh a. a. O., S. XXf.



ある。<sup>24)</sup> ここではさらに、主人公がその首領である盗賊騎士や仲間の許を離れる場面で、本物の宮廷生活に用いられるのと同じ Formel が使われているということにも注意すべきであろう。思い上がった主人公が農民出身者にふさわしくない行為をしていい気になっている様子を描くことで、作者が他の箇所と同様受容者に対する心理的效果（違法行為に敏感になること）を狙ったと考えられるからである。

v. 711, 1088 : ,friwip‘

v. 743, 1727 : ,friman‘

既に指摘したように、これらは主人公の両親の許で、いわゆる「体僕」状態 (leibeigen)<sup>25)</sup> でなく報酬を受け取って働いていた者たちをさす表現である。このような Obermagd, Oberknecht を所有する権利は、13 世紀当時の農民層にあってはたいへん狭く限定されていたという。その意味でこの主人公の父親は、農夫としてはきわめて裕福な暮らしをしていたことがわかる。(これらはさらに、「へたな宮廷人になるよりは畑を耕していた方がよっぽどいい」(v. 1104 – 1114) という発言等からもうかがえる。) ,friwip‘, ,friman‘ という表現は、今日よりはるかに広い意味を持ってより一般的に用いられた ,kneht‘ に比べて、その(相対的に)自由な地位をはっきり示すため、明らかに法体系にそったものであると言える。<sup>26)</sup>

24) Brackert et al. a. a. O., S. 145 f.

25) 訳語は久保 et al. a. a. O., S. 95 等による。

26) R. Schröder 1870, S. 302; Brackert et al. a. a. O., S. 146; Speckenbach a. a. O., S. 101. Vgl. Swsp. Landrecht 308 (Km); „ez sol mit recht niemant aigen läwt haben wann dew gotzhäwser vnd das reich vnd fürsten vnd frey herren vnd mitter freyen. wer dienstman ist der mag nicht aigen läwt haben. ein iegleich man der aigen ist der mag nicht aigner lewt haben.“ (「教会、帝国、諸公、フライエ・ヘレンおよび中級自由人以外は当然隷属民を所有すべきでない。家人である者は隷属民を持つことができない。誰であれ隷属している者は自ら隷属民を持つことができない。」Eckhardt 1974, S. 384. による) Vgl. Dsp. 61. (Eckhardt et al. 1933, S. 134 f.)

v. 970: „reht“

中世の法が今日にいう「法」と「権利」を区別していなかったことはよく知られているが、<sup>27)</sup> Tschirch はこの語が中世当時、人々の行動に規範を与えるすべてのものを含んでいたと特に述べている。つまり他人が自分に対して守るべき法的秩序（今日にいう自己の権利）と自分が他人に対して満たすべき道德的要求（今日にいう自己の義務）の両方を „reht“ が意味していたということを、即ち今日の Recht より広い意味があったと彼は指摘しているのである。<sup>28)</sup> ただし久保 et al.の注釈によると、„reht“ を法と訳した場合、これは「各人生得の社会的身分法 (Standesrecht)」のことであり、「権利というのは、特定の出生身分への所属にもとづく諸権利のこと」であるという。<sup>29)</sup>

v. 1019

„acht und ban daz ist ein spot.“

(追放だとか、破門だとか、そんなものはお笑いぐさだよ。)

„acht“ はここでは皇帝あるいは国王、つまり世俗権力の最高の地位にある者が下す追放刑であり、„ban“ は教皇、つまり宗教界の最高権力者が下す最も厳しい刑（破門）をさす。<sup>30)</sup> とくに Acht を被った者は法的保護を失うので、制裁の時決定的に不利になるほか、誰に拘束されても、またその際抵抗して殺されても、拘束しようとした者は罰されなかった。<sup>31)</sup> つまりこれらを宣告されることは平和喪失者となるのに等しいことであった。<sup>32)</sup> „Helmbrecht“ においては、主人公がそうした不都合を目にもかけないという態度をとっていることから、俗

27) たとえばケルン 1968, S. 129.

28) Tschirch a.a.O., S. 190.

29) 久保 et al. a. a. O., S. 54.

30) 浜崎 a. a. O., S. 165 f.; Brackert et al. a. a. O., S. 149. Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 498 f.

31) Schott 1984, S. 391 f.; Ssp. III 34. 1 – 3, 54. 3, 63. 2. (項目は久保 et al. a. a. O. による)

32) 「平和喪失」の概念についてはミッタイス et al. a. a. O., S. 58 ff. に詳しい。

界・宗教界双方の価値観をわかちもつ(農民)共同体から彼が離れてしまっていることがわかる。<sup>33)</sup>

#### v. 1067—1070

ein fuhspelz sô guoter,/ den brâht er siner muoter/ Helmbreht, der junge knabe;/ den zôch er einem pfaffen abe.

(母親には立派な狐の毛皮をこの小冠者ヘルムブレヒトは土産にもって帰りましたが、それは或る坊さんから召し上げたものでした。)

#### v. 1074—1076

einem krâmer hêt er genomen/ ein sidin gebinde,/ daz gap er Gotelinde,  
(ある小商人から絹の髪リボンをとって持っておりましたが、それを彼はゴテリントにやりました。)

これらの贈り物は主人公がまともに手に入れたものではなく聖職者と商人から奪ったと記されているが、この両者は当時の成文法ではとりわけ厚く保護されるべき存在だった。そのためこれらの人々に悪事をはたらくことは死刑にさえ値したのである。この点について Kolb は特に Dsp. の次の条文を引用した：

Nieman mac den rechten strâzraup begân wan an drier hande liuten : an pfaffen, an pilgrimen, an kaufliuten. Swer die beraubet ûf der strâze, den sol man henken ze der strâze, niht an den galgen dâ man ander liute ane henket. Ander rauber sol man enthanpten. (Dsp. 42 § 1)<sup>34)</sup>

(真正の辻強盗とは次の三者、即ち聖職者、巡礼者、商人に犯す行為にほかならない。これらの人々に路上で強奪を行う者は誰であれ、これを、他の者をつるし首

33) なおこれら王権・教皇権が当時の法体系にとっていかに重要であったかは、Ssp. や Dsp. がその記述の一番初めに両者を置いていることでもわかる。(Ssp. I 1. 1. [久保 et al. a. a. O., S. 33.] Vgl. Dsp. 1 [Eckhardt et al. a. a. O., S. 81] および Swsp. Landrecht 1 [Eckhardt a. a. O., S. 42])

34) Eckhardt et al. a. a. O., S. 118. Vgl. Swsp. Landrecht 40 (Eckhardt a. a. O., 91) .

にする処刑台ではなくその路傍でつるすべきである。これ以外の強盗は断首すべきである。)

Nu sult ir hoeren, an wem man den strâzraup müge begân. Daz tuot man an pfaffen, ob si pfäflîche varnt: reht umbeschorn, pfäflîche gewant, âne aller hande gewæfen; pilgrime die stap und taschen von ir liutpriester genomen habent; kaufliute die von lande ze lande varent unde von zungen ze zungen unde von einem künicrîche in daz ander. An den begât man den rehten strâzranp. (Dsp. 42 § 3)<sup>(34)</sup>

(さてどんな人に辻強盗が犯されるかをお聞かせしましょう。これはまず聖職者である。もし彼らが聖職者に相応しいでたちでいる、即ちきちんと剃髪し、それらしい衣服をまとい、いかなる種類の武器をも携帯していないならば。次に杖とかばんをその司祭から得た巡礼者。そして(最後に)国から国へ、言葉から言葉へ、そしてある王国から別のへと渡る商人である。これらの人々に真正の辻強盗は犯されるのである。)

こうした記述により、主人公の Helmbrecht が既に死刑に値する大罪人になっていることは明らかである。<sup>(35)</sup> 聖職者はともかく、商人がこうして保護されたのは、おそらく経済的な理由によるのであろう。たとえば久保 et al. によれば、「国王・諸侯は、彼らの支配領域内において、旅行者(なかんずく市場を訪れる商人)に武装した護衛を附けて道中の安全を保障し、その報償として旅行者から手数料を徴収する特権を有した。」<sup>(36)</sup> ほどだからである。

なおここを含めて作品の数箇所に出る、略奪によって得た「贈り物」はほとんどみな農民には相応しくない、あるいは彼らが身につけるとより高い身分の者の特権を犯すとされるものばかりである。<sup>(37)</sup>

35) Lange a. a. O., S. 228 ; Brackert al. a. a. O., S. 149.

36) 久保 et al. a. a. O., S. 174. Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 230 および 390.

37) 浜崎 a. a. O., S. 166.; Brackert et al. a. a. O., S. 149.

**v. 1129–1133**

mir hât ein richer getân/ so leide, daz mir nie man/ alsô vil getân hât:/  
über mines toten sât/ sach ich in eines riten.

(いつか或る金持のやつが、だれもまだ此のおれにそんな仕打ちをしたことがないほど、酷いことをしやがった。そいつがおれの名付け親の畑を、馬にのって踏んで通るのおれは見たんだ。)

元来畑仕事を嫌って家を飛び出した主人公がこうしたことで怒るのはどこか滑稽だが、畑（の種）の上を馬で歩くことは、中世当時では犯罪とみなされていた：

「誰しも耕作地の上に誤って道をとった者は、車輪一つごとに一プフェニツヒを、騎行者は半プフェニツヒを支払うべきであり、そして、その上に播種されている場合には、その損害を償うべきである。そのために人は彼等を差押えることができる。」(Ssp. II 27. 4)<sup>38)</sup>

ただしだからといって主人公が続けて述べているような仕返し（牛・豚・羊を奪うこと。v. 1134 – 1140）を実際に行ったら、それは報復過剰となろう。

**v. 1260–1264**

doch swie ræze si dâ sint,/ sô got wil selbe wachen,/ sô kan ein scherge  
machen,/ daz si tretent swie er wil,/ wær ir noch dri stunt als vil.<sup>4</sup>

(連中が如何にしたたか者だといっても、神様の目が光っていれば、役人はそいつらを思いどおりにあしらうことができるんだぞ。もっと、三倍もたくさん居たとしてもだ。)

ここは法の担い手である役人がいわば神通力を持っているため、どんな悪人でも必ず捕えられるという民間信仰に基づく表現であるという。(同様の記述が v. 1612 – 1626, 1639 – 1650 にもみられる)<sup>39)</sup> たしかにこのような解釈は

38) 久保 et al. a. a. O., S. 174. Vgl. 浜崎 a. a. O., S. 166.; Brackert et al. a. a. O., S. 150.

成り立つが、しかしその一方で、ここに現実の統治者に与する視点を読みとることもできる。この作品がなされたであろう 13 世紀当時は、きわめて多岐にわたる犯罪に罰として死刑が適用されていたが<sup>40)</sup>、これは逆に言うと治安がひどく悪く、社会が不安定だったことをも意味するのである。<sup>41)</sup> こうした状況にあっては、「悪党も最後には必ず退治される」というスローガンは民衆レベルでは「共通認識」からはまだほど遠く、現実の凄惨な実態を考慮すると、むしろ絶望的な祈りに似た願いだったのではないか。ましてここが息子の再度の出奔を父親が思い留ませようとするくだりであれば、この発言をことさらに民間信仰だけに結びつける必然性はさして大きくない。個々の犯罪がいつも必ず一件落着いていたのであれば、誰も非行には走らなかったであろう。だがここに Ssp., Swsp. 等の法典がおびただしいほど書写されて普及しているという現実がある。<sup>42)</sup> もちろん国家の諸制度が整えられていくなかで法の整備・普及が必要なのは論をまたないが、法典の普及の速さはとりもなおさず係争事の多かったことにも大きくかかわるであろう。こうした状況を踏まえると、社会の支配階級に属し、世の中の諸現象を統治者の目で見えていたであろうところのこの作品の受容者たちが上記のくだりに十分共感し、満足感も覚えたことは想像に難くない。まして作者が法律関係者であれば、主人公の父親（これは支配者の原理から見た善玉）にこうしたセリフを言わせる動機も十分であろう。

39) Lange a. a. O., S. 224; 浜崎 a. a. O., S. 167.; Brackert et al. a. a. O., S. 150; Speckenbach a. a. O., S. 95.; Tschirch a. a. O., S. 195.

40) 註 21) を参照されたい。

41) ミッタイス et al. a. a. O., S. 424.

42) Ssp. が 270 部, Swsp. が 380 部現存しているが、こうした法律書は信心書、娯楽書など他の分野に比べても一番多く残っているという。(エンゲルジング 1985, S. 35. ただし ミッタイス et al. [a. a. O., S. 418] は, Swsp. の残存部数を単に「250 以上」としている。)

v. 1268 – 1272

manege gans und manec huon,/ rinder, kæse und fuoter/ hân ich dir  
und miner muoter/ gefridet vor minen gesellen vil,/ des ich nû nimmer  
tuon wil.

（たくさんの鷺鳥や、にわとりや、牛や、チーズや、飼料といったようなものを、  
あんたとおっ母さんのために、おれの仲間たち大勢の手から守ってやってたんだ  
が、そんならもう、それも廃した。）

主人公はこれによって両親との平和的關係をまたもや自ら断ち切ったことになる。これは österreichischer Landfrieden によると死刑に値するという。なお ‚gefriden‘ という語は当時の Fehderecht の術語でもある。<sup>43)</sup>

v. 1285 – 1289

kürsen, mandel, lînwât,/ als ez diu kirche beste hât,/ des gæb er ir den  
vollen hort,/ hêt ir sô scherphiu wort/ gegen uns niht gesprochen.

（あの男は、毛皮や外套や亜麻布や、とにかく教会にあるうちでとびきり上等のやつを、  
どっさりとあのこにやったろうに、あんたがおれたたちのことをあんなに酷く  
言いさえしなかったらな。）

つまりここは Lemberslint らがある教会に対して既に略奪行為をはたしていることを意味する。これは landschädlich 以外の何ものでもない。教会は当時の法によって「永続的平和」を謳われて特別の保護を与えられていたからである。<sup>44)</sup> それゆえ教会に略奪を行う者はもちろん死刑に値した。<sup>45)</sup>

43) Lange a. a. O., S. 232 f.; Brackert et al. a. a. O., S. 150.

44) Ssp. II 66. 1. (本稿 v. 1919 – 1922 の項を参照されたい。) Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 103; Lange a. a. O., S. 228 f.

45) Ssp. II 13. 4. (久保 et al. a. a. O., S. 152) なお本稿 v. 1919 – 1922 の項も参照されたい。

**v. 1301–1305**

des wis gar âne angest,/ daz dû iht lange hangest,/ si slahe dich mit ir  
hant abe/ und ziuhet dich zuo dem grabe/ ûf die wegescheide;

(これは請けあってもいいが、お前がしばり首になるようなことがあっても、すぐにあのこはその手でお前を絞首台から切り落して、わかれ路の墓のところまでお前を引いて行くだろう。)

当時はしばしば三叉路のそばで絞首刑を行ったが、遺体は見せしめのために一定期間さらしものになっていた。このような者は一般の墓地（これは「聖なる場所」）には運ばれず、その場に埋葬されたのである。<sup>46)</sup>

**v. 1313f.**

ob dir diu sælde widervert,/ daz dir blintheit wirt beschert,

(もしお前が、運よく一命助かって、目つぶしの刑だけですんだなら、)

これは当時、慈悲によって死刑のかわりに目をくり抜く刑が行われえたことに対応している。<sup>47)</sup>

**v. 1317**

wirt dir der fuoz abe geslagen,

(もしお前が片足を切られたならば、)

この刑は単に歩行を困難にするだけではない。一般にまず左足を鐙にかけて馬に乗り降りしたので、この足を切り落とすことは、ひとりでは馬に乗れなくなることを意味した。もちろん騎士生活から遠ざけられることにもなる。<sup>48)</sup>

46) 浜崎 a. a. O., S. 167.; Brackert et al. a. a. O., S. 150.

47) Brackert et al. a. a. O., S. 150. なお v. 1688 の項を参照されたい。

48) Tschirch a. a. O., S. 196. なお v. 1690 の項を参照されたい。



v. 1321f.

ob man dir zuo dem fuoze/ der einen hende buoze,

(もしお前が片足だけでなく、手も片方切り落されてしまったなら、)

たとえば他人を殺したり傷害を負わせて身障者にしてしまったような場合、その者から生命ないしは片手を奪うという規定が Ssp. にみられる。<sup>49)</sup> なお当時は右手で①誓いをし、また②剣を携えた。従ってこれを失うということは騎士身分でなくなることはもちろん、名誉と権利をも失うことを意味した。ちなみにここでは右手か左手かが示されていないが、騎士身分の受容者ならことさら表現されていなくてもわかった筈だから、その必要がなかったと考えられている。<sup>50)</sup>

v. 1326 – 1328

„nimt mich din swester Gotelint,/ ze morgengâbe wil ich ir geben,/ daz si dester baz mac leben.

(『お前の妹のゴテリントがおれと結婚してくれたら、おれは彼女に初夜明けの贈り物をしよう、彼女がいっそう良い暮らしができるようになる。)

‘morgengâbe’ とは元来、夫が先立った場合妻が経済的に困らぬよう結婚の際彼女に与えられる、法にのっとった持参物のことである。<sup>51)</sup> ここに続く本文 v. 1329 – 1352 にかけて、様々な布、毛皮、衣類等を三つの袋に詰めて隠してあるという記述があるが、当時の法によれば騎士身分でない者はその花嫁に対

49) 「また或る人は他人を、肉に達する傷（を負わすこと）なしに、打ちまたは突きまたは投げることで他種々の仕方で、殺しまたは不具にすることがある。それによって彼は彼の手または生命を（罰として）失い、地方的追放の責を負うことになる。」(Ssp. I 68. 4. [久保 et al. a. a. O., S. 125]) 「誰しも他人を不具にしたりは傷つけた者は、彼がそれを承服させられるならば、彼から手が切り落される。」(Ssp. II 16. 1. [ibid., S. 157])

50) Tschirch a. a. O., S. 196. なお v. 1690 の項を参照されたい。

51) たとえば Brackert et al. a. a. O., S. 150.

し、モルゲンガーベとしては自分の馬または家畜以外を与えてはならなかったのだから、<sup>52)</sup> 彼らはここで再び新たな脱法行為を準備したことになる。

#### v. 1436f.

ich gibe dich dem selben man,/ swie leit ez dinem vater si;

(「おれはお前をあゝの男の嫁にやろう、お前のおやじなんか幾らでも嘆き悲しむが  
いいのさ。)

これにより、主人公は Gotelint に対する親権をその父親から奪ったことになる。<sup>53)</sup>

#### v. 1464 – 1469

manec witewe unde weise/ an guote wart geletzet/ und riuwec gesetzet,/  
dô der helt Lemberslint/ und sîn gemahel Gotelint/ den briutestuol  
besâzen.

(勇士レムベルスリントとその花嫁ゴテリントが結婚式を挙げるにあたり、あま  
たの寡婦や孤児が家財をそこなわれ、みじめな目にあわされました。)

寡婦と孤児は中世でもとりわけ重要な保護の対象であり、彼女らを守ること  
は騎士たちの名誉と義務にかかわることとされていた。しかもこれらの人々が  
ほとんど経済的に苦しい立場にあったことは間違いないからなおさらであ  
る。<sup>54)</sup> それにもかかわらずこうした弱者がいつも争乱の犠牲になったことは、

52) Ssp. I 20. 8.: 「すべて騎士の出自をもたない者は、彼等の妻に、彼等の有する最良の馬または家畜以外、モルゲンガーベとして与えることができない。」(久保 et al. a. a. O., S. 63) なお騎士の花嫁が何をモルゲンガーベとして得るかについては Ssp. I 20. 1 ff. (ibid., S. 59 ff.) に記述がある。Vgl. Dsp. 22 (Eckhardt et al. a. a. O., S. 95 f.) および Swsp. Landrecht 18 (Eckhardt et al. a. a. O. S. 64 f.)

53) Brackert et al. a. a. O., S. 152.

54) Vgl. Lange a. a. O., S. 228.; 浜崎 a. a. O., S. 168.; ミッタイス et al. a. a. O., S. 103, 230.; Tippleskirch a. a. O., S. 69; 阿部 1974, S. 103 – 112; Tschirch a. a. O., S. 198; O. ボルスト a. a. O., 2. S. 146.

治安法が更新されるたびにその保護が叫ばれていることに如実に現れているという。<sup>55)</sup>

#### v. 1507–1510

ûf stuont ein alter grise,/ der was der worte wise;/ der kunde sô  
getâniu dinc./ er staltet beide in einen rinc.

(ひとりの白髪の老人が立ちあがりました。たいそうもの識りで、このような場合にどうすればよいか、よく心得た人でした。みなで円陣をつくって兩人をその中に立たせ、)

Kolbによると、こうした円陣の中で(結婚の)誓いを行うのは当時のRechtswesenとかかわるという。しかしより正確に言うと、これは古来からの習慣がそのまま定着して、いわば「法化」したものである。中世の法は、元々は古くから口頭で伝承されてきた風習がそのまま定着したものであることが多いが、<sup>56)</sup> このケースはその典型と言えよう。<sup>57)</sup>

#### v. 1614: „sigenungt“

この語は「勝利」を意味するが、裁判官(Richter)の「魔力」を象徴する表現でもある。<sup>58)</sup> 裁判官の最高の義務は貧者たちに行われた不正を裁くことである、という信仰が古くから民衆レベルにあったので、<sup>59)</sup> Richterが強い力で悪党たちを取りおさえて裁くという記述は、あるいは何らかの民間信仰に基づくかもしれないが、やはりここでも上層レベルのPublikumの存在を忘れるべきではない。<sup>60)</sup>

55) Brackert et al. a. a. O., S. 152.

56) Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 22 ff.

57) Vgl. 浜崎 a. a. O., S. 168.

58) Brackert et al. a. a. O., S. 153.

59) Müller-Bergström 1936, Sp. 691 ff.

60) なお v. 1260 – 1264 の項を参照されたい。また v. 1622 – 1626 および 1639 – 1650

## v. 1631—1638

Gotelint verlôs ir briutegewant;/ bi einem zûne man sie vant/ in vil swacher küste./ si hêt ir beide brüste/ mit handen verdecket:/ si was unsanfte erschrecket./ ob ir anders iht geschæhe?/ der sage ez der daz sæhe.

(ゴテリントは花嫁衣裳を失くして、とある垣根のかげであさましい姿を見つられてしまいました。両の乳房を手でかくしていましたが、ひどく怯えておりました。他に何事か彼女の身に起こったかどうか、それは見ていた人でもあればお聞きください。)

ここは Forster らによると、花婿ならぬ司直の手下によって乱暴されることで Gotelint の性的欲求が皮肉な報いを受けたことを暗示するという：

ouch trûwe ich in gewern wol/ des ein man haben sol/ an einem starken wibe:/ daz ist an minem libe;(v. 1409—1412)

(もちろん私だって、丈夫な妻から、というのはこの私(の体)から、夫が受けるべきものはあのひとに上げられるはずだよ。)

婦人に対する暴行は、中世では一般に死刑に値するのだが、<sup>61)</sup> ここでは Gotelint がその欲望を露わにすることで既に一種の罪を犯しており、それが罰されたとされるのである。<sup>62)</sup> ただここではっきりさせておかなければならないのは、彼女が既に農村共同体の平和を破ってもいるということである。たしかに彼女は Lemberslint との結婚が完全に成立して、即ち「彼女が彼の臥床の中に入るとき、[初めて] 彼の法の中に入る」。<sup>63)</sup> この点だけを見ると、彼女はまだその農夫の娘としての権利能力を失ってはいない。一味が司直に襲われたのはまだ式の途中だったからである。つまりまだ Lemberslint と同じ「身分」に転

---

でも「役人の魔力」について述べられているが、これについても同様に 1260—1264 の項および Brackert et al. a. a. O., S. 153. を参照されたい。

61) 註 21) を参照されたい。

62) Forster 1948, S. 410 f. および Tippleskirch a. a. O., S. 69 f.

63) Ssp. I 45. 1. および III 45. 3. (久保 et al. a. a. O., S. 89 および 286)

落してはいないといえる。さらにまた一味が Helmbrecht を除いて皆処刑された時に彼女には何ら手を下された様子が見られないという点も、彼女の罪のなさを示唆しうることはある。しかし彼女の、兄にそそのかされたとはいえ、親を侮辱して (v. 1384 – 1392, 1414) 強引にその保護を離れた行為は、既に何度もふれたように明らかに当時の身分秩序を犯すものである。それゆえ Gotelint の受けた「罰」に関してはむしろ「平和破壊者が撲られても殺されても加害者は拘束されない」という法<sup>64)</sup>を思い出すべきであろう。仮に当時の下役人（あるいはさらにその下僚）に法的なモラルを求めるのが難しいとしても、<sup>65)</sup> 公権を司どる役人が婦女子に単なる「乱暴」をはたらくことには不自然さがつきまとうからである。<sup>66)</sup> まして作者が法律関係者であればなおさらであろう。これは文芸作品という虚構の世界の中で起きた出来事ではあるが、<sup>66a)</sup> また Gotelint は封建時代の女性であるから男と比べて法的な扱われ方も大幅に違っていたかもしれないが、やはり彼女も既に *friedlos* な状態に陥っていたと考えられる。司直の追求が真っ先には及ばずあとからその手がまわったのは、彼らがまず抵抗力を持つ 10 人の男たちを拘束しなければならなかったからであろう。Gotelint は v. 1704 を最後にこの作品から姿を消すが、以上の点により、単に性的欲求への罰を受けることでその「役目を終えた」<sup>67)</sup> のではないことがわかる。

64) Ssp. II 69. (久保 et al. a. a. O., S. 223) なお本稿 v. 349 – 357 の項を参照されたい。

65) たとえば Forster a. a. O., S. 410.

66) Gotelint が単なる「権利喪失者」だったなら、この役人の行為は完全な不法行為となり処罰の対象となる：「不真正な人々（＝合法婚姻外に生まれた者、権利能力を欠く者）（…）の一人を傷つけもしくは強奪もしくは殺し、または権利（能力）を欠く婦女を強姦し、それにより彼等について平和を破る者は、誰しも平和の法に従って裁判されるべきである。」(Ssp. III 45. 11. [久保 et al. a. a. O., S. 290 f.]）

66 a) Gotelint が、その「欲望」にせよ家族共同体の秩序にせよ、何らかの罪を犯したということを司直が知るプロセスが作品内に描写される必要は、まさにその虚構性ゆえになくなる。この作品受容者の間に彼女の罪と罰についての了解ができれば、作者のもくろみが達せられたことになるからである。

67) Brackert et al. a. a. O., S. 154.

v. 1651 : „spruch“

この語は直接には「判事による宣告」のことであり、法的術語である。<sup>68)</sup>

v. 1652 – 1654

wie die diebe krüchen/ für geriht mit ir burden/ dā si erhangen wurden.

(悪者どもは盗んだ品物を背負わされて、はうはう裁きの庭にひきたてられ、そこで絞首刑に処せられてしまいました [という話を])

v. 1667f.

ieglich truoc sin burde mit im hin; / daz was des rihters gewin.

(おのおのその重荷をかついで行きましたが、それらは判官の所有に帰してしまいました。)

Helmbrecht らの一味は「現行犯として」<sup>69)</sup> 捕えられたため証拠品として盗品の一部を背負って運ばされた。これによって彼らは抗弁のしようがなくなったことになる。しかも Lange によると裁判官自身がある場合に場合は彼が告訴人・証人・判事の役を兼ねることになるので、犯人の身元を確認するだけで刑吏に引き渡すことになるという。<sup>70)</sup> 盗品の扱いに関しては Ssp. に次のような条文がある。:

「彼 (=裁判によって生命を失った者) のもとで見出された窃盗品または強盗品は、これを裁判官が一年と一日自己のもとに保管すべきであり、もしその期間内にそれを適法に請求する人がないならば、裁判官はそれを自己の用益に向けることになる。」(II 31. 2.)<sup>71)</sup>

68) ibd., S. 153; Ruh a. a. O., S. 92.

69) Lange a. a. O., S. 229; Brackert et al. a. a. O., S. 153. なおこの場面は正確には結婚式の最中だったのだが、「ラント法令は、身請不能の身体刑を科しうるように現行犯の概念を拡張し、しばしば現行という標識を完全に無視してしまった。」(ミッタイス et al. a. a. O., S. 288) のである。

70) Lange a. a. O., S. 229. Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 365. ただし Ssp. III 53. 2 には「裁判官は、原告と同時に裁判官ではありえない」という条文がある。(久保 et al. a. a. O., S. 298.)

これによって本文 v. 1667 f. の真意は「押収した盗品は裁判官が一年と一日保管し、その後本来の持ち主が現れなければ彼の所有に帰す。」と解され、ただちに裁判官のものとなるわけではないことがわかる。<sup>72)</sup>

#### v. 1669

dô wart fürsprechen niht gegeben.

(弁護人はつけてもらえませんでした。)

一般の裁判、つまり権利能力を持つ自由人等の場合は弁護が認められたが、landschädliche Leute の場合はその特殊性ゆえにこれが認められなかったのである。<sup>73)</sup> また窃盗等の現行犯は初めから死刑と決まっていた。<sup>74)</sup>

#### v. 1670–1678

der in lengen wil ir leben,/ dem kürze got daz sine:/ daz sint die wünsche mine. / ich weiz den rihter sô gemuot:/ ein wilder wolf, gæbe im der guot, / bizze er'm und allen liuten vihe/ –von der wârheit ich des gihe–,/ lieze er in umbe guot genesen,/ swie des doch niht solde wesen.

(彼等を助けて生きのびさせようなどとする者は、天罰くだって己が命を縮めるがよい、というのが此の私の願いであります。さぞかし、判官は次のように考えたことであらうでしょう。そのような事があってはならないが、もしも、どうもうな狼から金品をうけて、その命を助けてやりなぞすれば、自分や世の人みなの家畜を喰うであらうと、——きっとそうに違いありません——。)

ここは裁判官に「買収」がきく可能性を示すところだとして、前後の文脈に

71) ibd., S. 178.

72) Lange a. a. O., S. 226.

73) R. Schröder a. a. O., S. 303; Lange a. a. O., S. 229.; Ruh a. a. O., S. 93. Vgl. Ssp. III 35. 1 (久保 et al. a. a. O., S. 267.)

74) Vgl. Ssp. III 36. 2 (ibd., S. 269) および註 21) を参照されたい。

相応しくないことから後代の埋め込み (Interpolation) だとする解釈があり、今までのところこれを否定することはできていない。そうした「不自然な付け足し」であるかどうかはともかく、当時の一般の刑罰は、たとえ死刑であっても、金品その他によってこれを贖うことができたという事実が一方にある。しかし landschädliche Leute が相手であったため再犯を恐れ、判事に刑の完全な執行を期待した気持ちの現れと見てよかろう。<sup>75)</sup> いずれにしても当時の「法」のあり方と深くかかわる箇所である。

#### v. 1679

Der scherge dô die niune hie;

(役人は九人の者を絞首刑にしましたが、)

死刑を実際に行うのは元来 Fronbote, Büttel, Weibel (それぞれが廷吏・刑吏・捕吏などと訳される。) 等の仕事だった。Scharfrichter, Henker (死刑執行人) という職は 13 世紀の都市でまず記録が出ているが、時には, scherge がこの役を引き受けることもありうるという。<sup>76)</sup> だが一般的には次のことが言える: 「参審(自由)人に関しては、彼等が彼等の生命を(罰として)失い判決によって奪われた場合、正規のフローンボーテ以外いかなる人も処刑することをえない。」<sup>77)</sup> だが「他の犯罪者はより低い身分のクネヒテに処刑させていた。」<sup>78)</sup> つまりこうした役人の下僚もまた社会の底辺に生きていたのである。<sup>79)</sup>

75) Keinz 1887, S. 91; Gough a. a. O., S. 69; Ruh 1967, S. 7 f.; ders. 1974, S. 93; Brackert et al. a. a. O., S. 153 f. さらにあえて推測すれば、当時は国庫の貨幣収入欲によって死刑を含む多くの刑が金品によって贖いえたからこそこうした表現が出たのであって、今日の「買収」の概念では却ってここをとらえきれなくなろう。本文中に散見されるように「役人が神の代理」であるなら、また作者が法律関係者であるならなおのことである。Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 156.

76) Brackert et al. a. a. O., S. 154. なおここは, scherge の意味の厳密な同定が望まれる箇所である。註 23) を参照されたい。

77) Ssp. III 55. 2 (久保 et al. a. a. O., S. 301.)

78) 阿部 1978 b, S. 33.

79) Vgl. プレティヒャ 1982, S. 132 ff.



**v. 1680f.**

den einen er dô leben lie/ (daz was sîn zehende und sîn reht):

(一人だけ命を助けておきました。(これは彼にとって十人目の男で彼の権利でありました))

これはおそらく古代ゲルマン時代から受け継がれた法的習慣であろう。Ssp. や Swsp. には対応する記述がある。:

「刑吏は有罪の判決を受ける十番目毎の人物に対しても権利をもつ。これは刑吏が彼を請け戻すためである。」<sup>80)</sup>

つまり死刑囚が 10 人いれば刑吏 (Fronbote) はそのうちの 1 人を引き取ることができたのである。しかしこうして一度は身請けされた者もそのままでは済まず、この作品に出るように (次項の v. 1688, 1690 f. を参照) 肉体的私刑が加えられ、「恥多くして生きながらえる (schamelich genesen)」(v. 1702) ことも多かったのである。<sup>81)</sup> なおこうした身体刑には、彼が平和破壊者として刑を受けたことを衆目に晒す、つまり生きながらえてもなお危険人物であることを本人に示させる意味もあったろう。

**v. 1688**

der scherge im ûz diu ougen stach.

(役人は彼の両の眼をくりぬいてしまいました。)

**v. 1690f.**

man rach die muoter, daz man im sluoc/ abe die hant und einen fuoz.

(母親への仕打ちの報いとして、片手片足を切り落とされました。)

ここでは本文 v. 1030 – 1032 の主人公自身の発言のテーマと、既に扱った

80) Ssp. III 56. 3. なおこの訳文は Schott 版の現代ドイツ語訳 (Schott 1984, S. 203) に基づく。Vgl. Swsp. Landrecht 124 および 126 (Eckhardt a. a. O., S. 189 [Km+Kb]), Dsp. Landrecht 301 (Eckhardt 1971, S. 329)

81) Vgl. R. Schröder a. a. O., S. 303 f.; Lange a. a. O., S. 230; Brackert et al. a. a. O., S. 154; Tschirch a. a. o., S. 202.

v. 1313 – 1322 に出る彼の仲間の Lemberslint に対する言葉のテーマが繰り返されている。注目すべきは、Brackert らの言うように「目をくり抜く刑が中世当時しばしば死刑のかわりに行われた。」という点である。<sup>82)</sup> これにより、主人公とその「義弟」になりそこねた男は、既に自らの行状が法に照らせば死刑に値するとわかっていたことがうかがえる。

ところでここでは主人公が肉体刑の他に罰金ないし贖罪金を払わされた形跡はないが、その法的根拠たりうる例として Ssp. III 50. がある：

「ドイツ人が犯罪により（罰として）彼の生命または彼の手を失う場合には、彼がそれを請け戻してもまた（そう）しなくても、彼はそれに加えて罰金をも贖罪金をも支払うことを要しない。」<sup>82a)</sup>

この原則に従えば、主人公 Helmbrecht は金は誰にも支払わずに済んでいる筈である。しかし「10 人目の死刑囚が請け出される」という、普通とは違う場合にもこの法が通用したのかどうかはわからない。あるいは当時の受容者には自明な、何らかのプロセスが含まれていたかもしれない。司直に拘束された時点で彼らは全ての持ち物を没収され、金を払う余裕などなくなっていた。だから主人公・刑吏・裁判機関の間に金銭授受はなかったと考えたいが、いずれにしてもこのパラグラフの正確な解釈のためには関連する法をまず理解することが必要である。

#### v. 1707 – 1711

den blinden diep Helmbrecht/ brähte ein stap und ein kneht/ heim in

82) Brackert et al. a. a. O., S. 154. Brackert らは、こうした重刑は主人公が家族の秩序を破ったことに対する罰だと考えている。だとすると、この作品では明記されていないが、先に見たように同じく親を侮辱して家を出た Gotelint もやはり同じ重罪を犯したことになる。なお当時は刑罰の厳格化にともない、重刑の場合は金をもってしてもこれを贖うことがもはやできなくなりつつあった。Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 424. また v. 1670 – 1678 の項も参照されたい。

82 a) 久保 et al. a. a. O., S. 294.

sines vater hûs./ der behielt in niht : er treip in ûz./ sîn swære er im niht  
buozte.

(一本の杖と一人の下僕が、この盲の悪者ヘルムブレヒトを故郷の父の家へ導いてまいりました。父親は彼を家へ容れずに追い出してしまい、その苦難を救ってやろうとしませんでした。)

ここは既に何度もとり上げた箇所 (v. 419, 426, 571, 1268 ff., 1436 f., 1688, 1690 f.) に対応するのだが、父母の度重なる説得にもかかわらず、息子である主人公は二度も親許を飛び出すことで彼らとの結びつきを自ら断ってしまっていた。彼はこれにより自動的に法的保護を失った。—— 結局 rechtlos, ehrlosそして friedlos の状態になった<sup>83)</sup>—— のだから、身分階層のヒエラルヒーにまっとうに属する農夫にとっては別世界の人間となってしまったのである。それどころか既に悪業を重ねて「社会の敵」—— landschädlich —— になっていたとあっては、いくら息子でも敵意こそあれ、同情心などは残ってもいないのである。仮に憐れみがあったとしても、一般に犯罪者を受け入れることを許さない法があった。:

「誰しも、地方的追放に処されている人を知りながら宿泊または食事させるならば、彼はそのゆえに罰金を支払わなくてはならない。」 (Ssp. III 23.)<sup>84)</sup>

地方的追放に処されているだけでこの厳しさならば、平和破壊者の場合はもっと重大だったろう。この点で特に指摘しておきたいのは、ある人物が単に ehrlos や rechtlos であるだけなら、ここで記されたような大問題とはならなかったということである。その典型的な例はいわゆる Spiellente であろう。<sup>85)</sup> 前稿でも若干ふれたが、彼らは主に各地を巡り歩きながらそれぞれの持つ芸を、農村の路傍から修道院にいたるまで実に様々な所で披露していた。<sup>86)</sup> もち

83) Vgl. ミッタイス et al. a. a. O., S. 58 ff.

84) 久保 et al. a. a. O., S. 253.

85) たとえば Ssp. I 38. 1:「(…) 遊芸人 (…) はいずれも権利 (能力) を欠く (rechtelos)。」 (ibd. S. 82 f.)

86) 寺田 a. a. O., S 132.

ろん法的にはいわばアウトサイダーであるから、日常しばしば差別に遭い、危険な生活を余儀なくされてもいたろう。しかし Ssp. によると彼らが自らの法的位置づけゆえに司直の追求を受けることはなかったのである。<sup>87)</sup> 本題に戻るならば、排他的性質の強い身分共同体・地域共同体どころか氏族共同体をも脱け出た者は、法的には平和喪失者として、また社会通念上も忌むべき者として、たいへん厳しい扱いを受けたことがここで十分に読みとれるのである。<sup>88)</sup>

#### v. 1723: ,teidinc' (< tage-dinc)

「談議」。これは元来「裁きの場での弁論」等を表す法律用語である。この例はそれが転用されたもの。<sup>89)</sup>

#### v. 1830f.

dem hêt Helmbreht eine kuo/ genomen von siben binden.

(ヘルムブレヒトは會てその男から七度も子を生んだ雌牛を奪ったことがありました。)

#### v. 1839 – 1841

mir und mînem wibe/ zôch er ab dem libe/ unser beider gewant;

(あいつは此のおれさまと女房と、二人の体から着物をひっぺがして行きやがった。)

87) Vgl. Ssp. I 50. 2: 「たとい或る人が遊芸人 (...) に生まれた者であるとしても、彼は、人から決闘人を差し向けられるような、強盗や窃盗の仲間ではない。」久保 et al. a. a. O., S. 94. 但し寺田 a. a. O., S. 144. (→Bumke 1986, S. 695 f.) も参照されたい。

88) 本文に v. 1800 f. および 1809 – 1811 の父親の言が氏族共同体の点の証左となる他、「地方的追放 (Bezirksacht)」という法律用語もある意味で地域共同体の排他性の強さを表すと言えよう。Vgl. Lange a. a. O., S. 233.; Brackert et al. a. a. O., S. 154.; A. ボルスト a.a.O., 下 S. 43 および 301.

89) Ruh a. a. O., S. 93.

v. 1846–1848

er vil unreine,/ er brach mir ûf mînen glêt/ und nam daz ich dâ inne  
hêt.<sup>4</sup>

(あの悪党め、うちの庫を押しやぶって、中に入ってたものをもって行きやがった。)

v. 1853–1860

er stiez mîn kint in einen sac,/ dô ez slâfende lac;/ er want ez in ein  
bet:/ ez was naht, dô er daz tet./ dô ez erwachte unde schrê,/ dô  
schutte erz ûz an den snê./ sin ende hêt ez dâ genomen,/ wær ich im  
niht ze helfe komen.

(あれは夜中のことだったが、あいつはうちの子供が眠っているのを袋に詰めて、  
ベッドでふとんむしにしがったんだ。子供が目をさまして泣いたら、雪の上に  
ほうり出しやがった。もしおれが助けに行かなかったら、そのまま死んでしまう  
ところだったんだぞ。)

v. 1865

er nôtzoget mir mîn kint.

(あいつめ、うちの子にわるさをしがった。)

以上は既に公的な裁きと刑を一応終えている主人公が、もはや頼れる身寄りもなく瀕死でさまよっているところを、かつて悪業をはたらいた相手の5人の農夫たちに見つかった場面である。この農夫たちに対して犯された罪は、当時の治安令に照らせばみな死刑に値するものである。<sup>90)</sup> そこで彼らはこの時とばかりに Helmbrecht に襲いかかって打ちのめし (v. 1877 f.), しまいにはつるし首にしてしまう。(v. 1909)。こうした行為それ自体は現代の視点から見るとリンチ(私刑)であって不当な復讐行為なのだが、Langeによると当時はそれも合法的なものだったという。成文法にのっとった裁きは俗界の権力者、つま

90) Lange a. a. O., S. 233 f. および Brackert et al. a. a. O., S. 155. なお註 21) を参照されたい。

り騎士身分の者たちに独占されていたが、「殺人」やそれに類する侮辱行為については他のあらゆる身分層にも、いわゆる自己裁判を行うことが認められていたのである。<sup>91)</sup> なお権利能力を欠くだけの者たちに不正行為をはたらけば、一般には懲罰の対象になるのだが、<sup>92)</sup> ここは主人公が既に権利能力を失っているとはいえ、その原因となった諸々の犯罪に対する民衆側の自己裁判であり、また彼が *friedlos* でもあるから、これらの農民はいわば合法的な復讐を行ったと解される。<sup>93)</sup>

#### v. 1879 – 1891

.nû hüete der hûben, Helmbreht!'/ daz ir dâ vor des schergen kneht/ hêt lâzen ungerüeret,/ daz wart nû gar zefüeret,/ daz was ein griuwelich dinc:/ sô breit als ein phenninc/ beleip ir niht bi einander./ siteche und galander,/ sparwære und turteltûben,/ die genâten ûf der hûben,/ die wurden gestreut ûf den wec./ hie lac ein loc, dort ein flec/ der hûben und des hâres.

(「それ、帽子に気をつけろよ、ヘルムブレヒト」と。先に、役人の手下も手をつけずにおいたその帽子が、こうして滅茶苦茶にされてしまいました。それはまったく、すさまじい有様でした。その帽子のどの切れっ端をとってみても、銅錢ほどの大きさもありはしませんでした。おおむや、雲雀や、はいたかや、きじばとなど、その帽子に刺繍されていたものが路上に蹴散らされてしまいました。きれぎれになった帽子や髪の毛がここかしこに散らばっていました。)

主人公の帽子は「出世欲と思い上がりの象徴」だったが、その最期には結局八つ裂きにされてしまい、「思い上がりが招く恐ろしい結果、秩序を乱そうとする者への神の正義の復讐を明示する」<sup>94)</sup> ことになるのである。さらにここでは、

91) Lange a. a. O., S. 234.

92) Vgl. Ssp. III 45. 11. (→註 66) を参照されたい。)

93) Vgl. Ssp. II 69. (→本稿 v. 349 – 357 の項を参照されたい。)

(農民という) 自分たちの枠組みを飛び出そうとした男に対する身分共同体の復讐がなされ、その際にこの裏切り者が指向した身分の象徴に焦点があてられたという要素もおおいに考慮すべきであろう。作者もこの物語の冒頭で嘆いてみせている：

owê daz ie gebûre/ solhe hûben solde tragen/ dâ von sô vil ist ze sagen!  
(v. 54 – 56)

(なんとまあ、百姓の身空でこのような帽子をかぶろうなどとは、これについて、いろいろ申し上げなければなりません。)

帽子だけではない。彼は「ブロンドの巻き毛」を「肩越しにふさふさと」のばしていたが (v. 10 – 13), これも貴族の身分にふさわしいことだったという。<sup>95)</sup>

#### v. 1902 – 1909

si liezen in sine bihte/ den müedinc dô sprechen./ einer begunde brechen/  
eine brôsmen von der erden:/ dem vil gar unwerden/ gap er si zeiner  
stiure/ für daz hellefiure/ und hiengen in an einem boum.

(彼等はそのみじめな男にざんげを称えさせました。ひとりの男が土をひとかけかき取りました。全く、そんなことをしてやる値打ちもない者ではありましたが、地獄の業火をしのぐ助けとしてその土くれを彼に与え、そうして一本の木に吊してしまいました。)

94) O. ボルスト a. a. O., 1. S. 134.

95) Vgl. Bumke a. a. O., S. 173. また Neidhart von Reuenthal 1984, S. 185 (詩節 102, 14). 但し、当時は「何を着てよいか」が身分によって決まっていたらしいものの、いわゆる Kleiderordnung と呼ぶべき成文規定が 13 世紀のドイツ語圏からは僅か一項目しか残っていないうえ、それ——「農民は灰色と安手の青の衣服と牛皮靴以上のものを身につけるべからず」——がどの程度の効果をもっていたのかの判定も難しいため、この「帽子」問題はともかく他の箇所での衣裳・布地等については、本稿ではまだ確言できない。(以上 Bumke a. a. O., S. 172 – 175 を参照。)

ここは純粹に「法的」とはいえないが、当時のある習慣を表した箇所である。死刑の判決を受けた者や死に瀕した者に対する聖体拝領の儀式 (Erdkommunion) は、火急の場合聖職にない者、つまり俗人にもこれを行くことが認められていた。<sup>96)</sup> なお v. 1903 に出る ‚müedinc‘ (「みじめな人」) は、元来は「不自由な人」を意味していた。<sup>97)</sup>

#### v. 1917: erteilen

これは「ある判決を与えるものとする」という意味で、これも法的ニュアンスの強い語である。<sup>98)</sup>

#### v. 1919–1922

ûf den strâzen und ûf den wegen/ was diu wagenvert gelegen:/ die  
varent alle nû mit fride,/ sit Helmbrecht ist an der wide.

(あの道も、この路も、車の往来が跡絶えておりましたが、ヘルムブレヒトがしばらく首になってからというもの、みなまた平穩無事に走るようになりました。)

ここは既に前稿の「Fahrender 説」でも扱った記述だが、<sup>99)</sup> Kolb がその演習で強調したように、法律的にもきわめて重要である。当時から道路交通は経済・産業・軍事等あらゆる面で絶対といってよい程安全が確立されねばならず、逆に言うと辻強盗らの格好な狙い場となっていたわけだが、成文法でもこうした現実に対応してその安全や通行料徴収等について詳しい規定があり、重要な保護対象となっていた。たとえば：

「(…) 教会堂および墓地ならびに各村落、(…) 鋤および水車、水上および陸上の国王の道路、これらは永続的平和を有すべく、そしてそこに入来するすべ

96) Brackert et al. a. a. O., S. 155. Vgl. Tippleskirch a. a. O., S. 70; Tschirch a. a. O., S. 207.

97) Ruh a. a. O., S. 94.

98) ibd, S. 94.

99) 寺田 a. a. O., S. 146.



てのものもまたしかり。」(Ssp. II 66. 1)<sup>100)</sup>

なお v. 1921 に出る ‚fride‘ とはもちろん Rechtssicherheit のことである。

(つづく)

**【前稿 (寺田 1987) の訂正・補遺】**

S. 136, 上より 14 行目: (誤) v. 54 – 56 → (正) v. 94 – 96

S. 145, 下より 4 行目: (誤) v. 717 → (正) v. 717 f.

S. 147, 上より 2 行目: (誤) Fanziskaner → (正) Franziskaner

S. 150, 下より 7 行目: (誤) 註 54) および 55) → (正) 註 55) および 56)

S. 152, 下より 2 行目に次の文を補う:

「但し ‚Seifried Helblinc‘ は今日では実際の作者名とはみなされていない。たとえば Joachim Heinze: Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Beginn der Neuzeit. Hrsg. von J. H. Bd. II / 2. Königstein/Ts. 1984, S. 70 を参照。」

---

100) 久保 et al. a. a. O., S. 220 f. なお ibd., S. 174. (→本稿 v. 1074 – 1076 の項), Ssp. II 59. 3. (ibd., S. 212 f.), ミッタイス et al. a. a. O., S. 103. および阿部 1978 a, S. 10 – 17 を参照されたい。

## 参 考 文 献

(雑誌・シリーズ名の略号については慣用に従う。前稿で挙げた文献は、参考にした場合であっても、本稿で特に引用していない限りここで再録しない。)

„Helmbrech“ の校訂版と翻訳

Brackert, Helmut et al. 1972: Wernher der Gartenaere, Helmbrecht. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Herausgegeben, übersetzt und mit einem Anhang versehen von H. B., Winfried Frey, Dieter Seitz. Frankfurt/Main (Fischer Taschenbuch 6024).

Gough, Charles E(dward) 1947: Meier Helmbrecht. A Poem by Wernher der Gartenaere. 2. Auflage. Oxford. (Backwell's German Texts).

浜崎長寿 1970: 『ヘルムブレヒト物語』東京 (三修社)

Keinz, Friedrich 1887: Helmbrecht und seine Heimat. 2., umgearbeitete Auflage. Leipzig.

Ruh, Kurt 1974: Wernher der Gartenaere, Helmbrecht. 9., neubearbeitete Auflage. Tübingen. (ATB 11).

Speckenbach, Klaus 1974: Wernher der Gartenaere, Helmbrecht. Text, Nacherzählung, Begriffserklärungen. Darmstadt.

Tschirch, Fritz 1978: Wernher der Gärtner, Helmbrecht. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Herausgegeben, übersetzt und erläutert von F. T. Durchgesehene und verbesserte Ausgabe. Stuttgart. (RUB 9498).

その他の作品の校訂版と翻訳

(Dsp. ) Eckhardt, Karl August 1933: Deutschenspiegel. Herausgegeben von K. A. E. und Alfred Hübner. 2., neubearbeitete Ausgabe. Hannover. (Monumenta Germaniae Historica. Fontes Iuris Germanici Antiqui. Nova Series. Tomus III).

(Dsp. ) ————— 1971: Deutschenspiegel. Aalen. (Bibliotheca Rerum Historicarum. Studia Iuris Teutonici. Tractavit K. A. E.).

Neidhart von Reuenthal 1984: Die Lieder Neidharts. Herausgegeben von Edmund Wießner. Fortgeführt von Hanns Fischer. 4. Auflage revidiert von Paul Sappeler. Mit einem Melodieanhang von Helmut Lomnitzer. Tübingen. (ATB 44).

(Ssp.) Eckhardt, Karl August 1973: Sachsenspiegel Landrecht. Herausgegeben

- von K. A. E. 3., durchgesehene Ausgabe. Göttingen. (Monumenta Germaniae Historica. Fontes Iuris Germanici Antiqui. Nova Series. Tomi I Pars I. Editio Tertia). (邦訳: 久保 et al. 1977: 『ザクセンシュピーゲル・ラント法』 久保正幡・石川武・直居淳訳 東京 (創文社). (ただし本書は原著 第2版 [1955] に基づく))
- (Ssp.) Schott, Clausdieter 1984: Eike von Repgow, Sachsenspiegel. Herausgegeben von C. S. Übertragung des Landrechts von Ruth Schmidt-Wiegand. Übertragung des Lehenrechts und Nachwort von C. S. Zürich. (Manesse Bibliothek der Weltliteratur).
- (Swsp.) Eckhardt, Karl August 1974: Schwabenspiegel Kurzform I und II. Fassungen Km Kb Ks. Aalen. (Bibliotheca Rerum Historicarum. Land- und Lehnrechtsbücher 4. Editio Altera Curavit K. A. E. )

#### 研究文献

- 阿部謹也 1974: 『ハーメルンの笛吹き男 — 伝説とその世界』 東京 (平凡社)
- 1978 a: 『中世を旅する人々 — ヨーロッパ庶民生活点描』 東京 (平凡社)
- 1978 b: 『刑史の社会史. 中世ヨーロッパの庶民生活』 東京 (中央公論社) (中公新書 518)
- Borst, Arno 1979: Lebensformen im Mittelalter. Frankfurt/Main, Berlin, Wien. (Ullstein Buch; Nr. 34004). (邦訳: A. ボルスト 1987: 『中世の巻にて』 上・下. 永野藤夫・井本响二・青木誠之訳 東京 (平凡社))
- Borst, Otto 1983: Alltagsleben im Mittelalter. Frankfurt/Main. (insel taschenbuch 513) (邦訳: O. ボルスト 1985: 『中世ヨーロッパ生活誌』 1・2, 永野藤夫・井本响二・青木誠之訳 東京 (白水社))
- Bumke, Joachim 1986: Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter. München. (dtv 4442).
- Engelsing, Rolf 1973: Analphabetentum und Lektüre. Zur Sozialgeschichte des Lesens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft. Stuttgart. (邦訳: R. エンゲルジング 1985: 『文盲と読書の社会史』 中川勇治訳 東京 (思索社))
- Forster, Leonard 1948: Gotelint and the Constables. ('Meier Helmrecht', 11. 1936 — 7 and 1646 — 7). in: MLR 43.
- Funcken, Liliane und Fred 1979: Rüstungen und Kriegsgerät im Mittelalter, 8. — 15. Jahrhundert. Ritter in Turnier und Schlacht, Raubzüge und Belage-

- rungen, Sturm auf Burgen und Festungen. München.
- Müller-Bergstrom, (...) 1936: Richter. in: Handbuch des deutschen Aberglaubens. Bd. 7. Herausgegeben von Hanns Bächtold-Stäubli, unter Mitwirkung von Eduard Hoffmann-Krayer, mit einem Vorwort von Christoph Daxelmüller. Unveränderter photomechanischer Nachdruck. Berlin, New York. 1987. S. 691 – 694.
- Kern, Fritz 1952: Recht und Verfassung im Mittelalter. Basel. (邦訳: フリッツ・ケルン 1968: 『中世の法と国制』世良晃志郎訳 東京(創文社))
- Kolb, Herbert 1962: Der ‚Meier Helmbrecht‘ zwischen Epos und Drama. in: ZfdPh 81, S. 1 – 23.
- Lange, Günter 1970: Das Gerichtsverfahren gegen den jungen Helmbrecht. Versuch einer Deutung nach dem kodifizierten Recht und den Landfriedensordnungen des 13. Jahrhunderts. in: ZfdA 99. S. 222 – 234.
- Mitteis, Heinrich 1969: Deutsche Rechtsgeschichte, ein Handbuch, neubearbeitet von Heinz Lieberich, 11., ergänzte Auflage. München. (邦訳: ミッタイス et al. 1971: 『ドイツ法制史概説』(改訂版) 世良晃志郎訳 東京(創文社)).
- Panzer, Friedrich 1925: Zum Meier Helmbrecht. in: PBB 49. S. 142 – 151.
- Pleticha, Heinrich 1971: Bürger Bauer Bettelmann. Würzburg. (邦訳: ハインリヒ・プレティヒャ 1982: 『中世への旅. 都市と庶民』関楠生訳 東京(白水社))
- Ruh, Kurt 1967: Der ursprüngliche Versbestand von Wernhers ‚Helmbrecht‘. in: ZfdPh 86. (Sonderheft) S. 3 – 14.
- Schiffmann, Konrad 1917: Studien zum Helmbrecht. in: PBB 42. S. 1 – 17.
- Schröder, Richard 1870: Corpus juris germanici poeticum. II. Wernher der gartenaere und bruder Wernher. in: ZfdPh 2, S. 302 – 305.
- 寺田龍男 1987: 『„Helmbrecht“ の作者の身分について (その一)』in: 「人文研究」(小樽商科大学) 74. S. 127 – 160.
- von Tippelskirch, Ingrid 1973: Zum Helmbrecht. in: Euphorion 67. S. 60 – 70.